

第5章 和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査

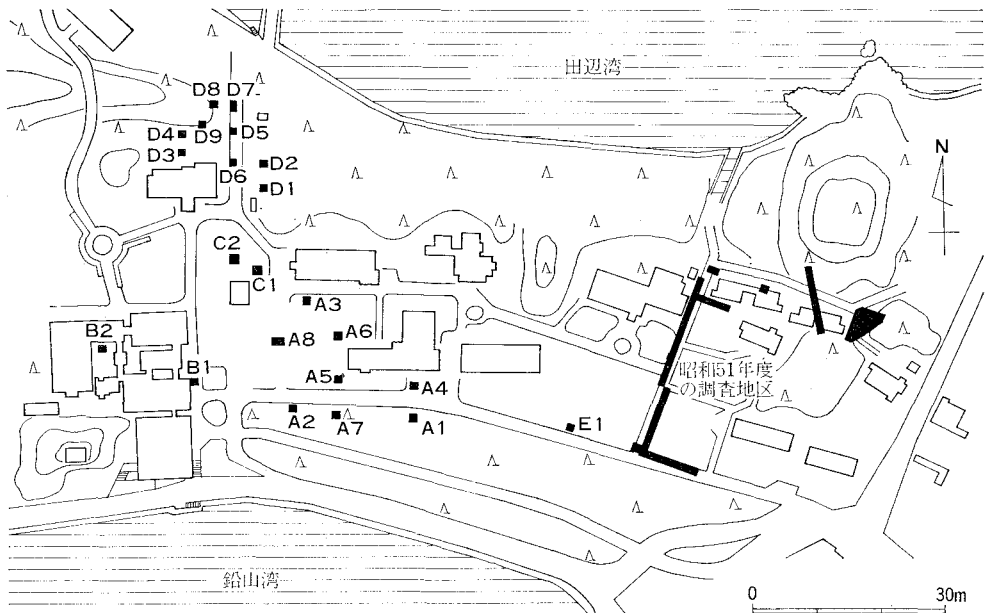
泉 拓良ほか

1 遺跡の概要と調査の経過

瀬戸遺跡は、和歌山県西牟婁郡白浜町にあり、現在は京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所の構内にある。白浜町の温泉街から北西に突き出た岬の先端に位置し、東と西には丘陵が迫り、南と北は海に接する砂州上に遺跡は立地している。遺跡の周辺には川がないが、東端の山際には、御殿井戸と呼ばれる井戸があり、現在の水面は地表下2mである（図版15-1）。昭和51年度に職員宿舍新営工事に伴って、この遺跡の発掘調査を行い、縄文晩期の埋葬人骨1体と古墳時代の箱式石棺と古墳とを発見した（第29図）〔京大調査会77，京大埋文研78a〕。

瀬戸臨海実験所の将来計画が作成され、実験研究棟，水族館，学生寄宿舍の3棟が新営される予定となり、その予定地について本年度試掘調査を実施することになった。

調査地を各地域ごとにA～E区の5ヶ所に分けて、試掘坑には各区ごとの通し番号を付した（第29図）。調査にあたっては、遺跡と微地形との関係を明らかにするため、できる



第29図 試掘坑の位置

だけ深く掘り、海成層を確認するように努力し、砂堆の粒度分析を行うことにした。

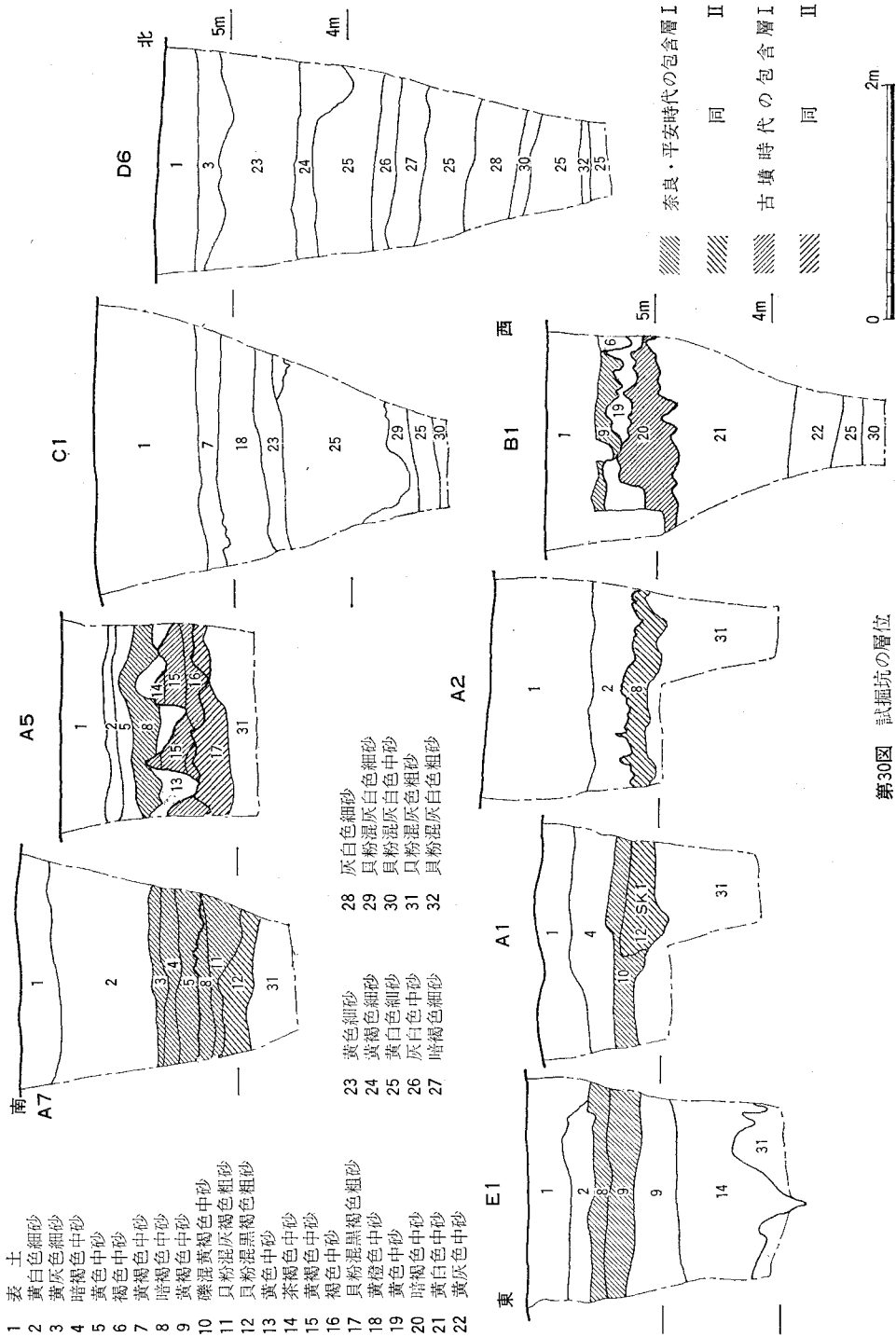
2 層位と遺構

今回の調査地は実験所の西半部で、地表面は標高5.5～7.0mである。試掘坑A2とA7付近がもっとも高く、周囲は緩やかに低くなるが、A2、A7、A1の南は急な傾斜である。またD7は、西の丘陵から延びる尾根状起伏の末端に位置し、やや高くなっている。層位は各地域や試掘坑ごとに細部において異っている。しかし、全体的にみると、南北方向の層位には大きな差を認めうるが、東西に並ぶ試掘坑は類似しているものが多い(第30図)。

まず、試掘坑A7、A5、C1、D6の層位で、調査地全域の南北方向の堆積をみる(第30図上)。A7では表土の下に粒子の細かい黄白色細砂が厚く堆積しており、その下の黄灰色細砂層と暗褐色中砂層には、パミスとスコリアが含まれている(図版15-2)。第4～12層は奈良・平安時代の遺物を包含する層で、第12層貝粉混黒褐色粗砂は、その下の貝粉混灰色粗砂が土壌化したものであろう。A5は、今回の調査で遺物が最も多く出土した試掘坑である。第14・15層上面と第17層上面には侵蝕を受けた痕跡がある(図版15-3)。第8層が奈良・平安時代の遺物を包含し、第14～17層は古墳時代の遺物を包含していた。第17層はA7の第12層と同様に、下位の第31層が土壌化したものであろう。A7とA5はよく似た層序であったが、C1とD6はそれらとはまったく異なる。C1の表土直下の黄褐色中砂層、黄橙色中砂層以外は、ほとんど粒子の細かい細砂層である(図版16-1)。この細砂層の間層として、貝粉の混った砂(第27～30層)が入る。

次に、試掘坑E1、A1、A2、B1の層位で、調査地南部での東西方向の堆積をみる(第30図下)。E1、A1、A2の層位は類似しており、標高5.0～5.5mに奈良・平安時代の包含層がほぼ水平にみられる。A1とA2ではこの包含層の下に、現在の海岸の砂によく似た貝粉の混った灰色粗砂が厚く堆積しているが、E1ではこれらの間に、貝粉の混らない層が介在する。一方、B1の層位は、上部がA5の層位と類似するが、下部はC1の細砂層を主体とする層位に類似しており、B1付近が南部と北部との堆積状況の変わりめと考えうる。

検出した遺構は、試掘坑A1の第10層中で検出した土坑SK1と、D7の黄色細砂上面で検出した縄文晩期の貝ブロックSX1である(図版16-2)。SK1の検出した部分は、南北0.5m、東西1.0mで、遺構は試掘坑の外へ延びている。深さは約0.3m、奈良後期ごろの完形の土師器杯(第32図IV5)と製塩土器(IV29)などの破片が出土した。SX1は3つの



第30図 試掘坑の層位

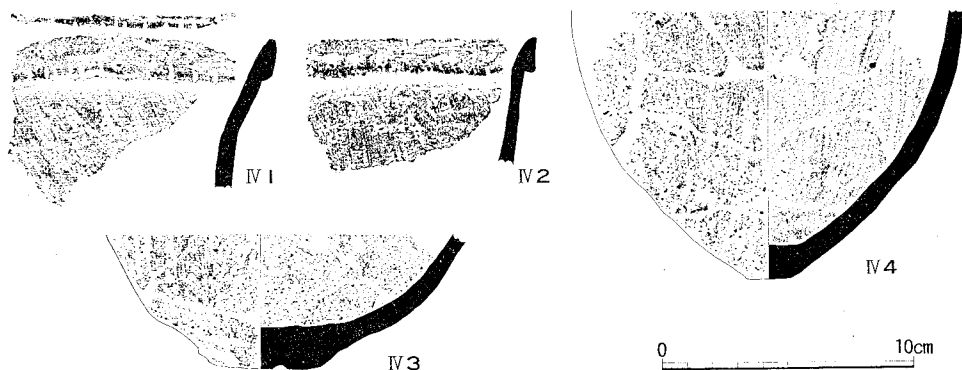
貝ブロックからなるが、それぞれに差は認められず、小型の巻貝が主体であった。

3 遺物

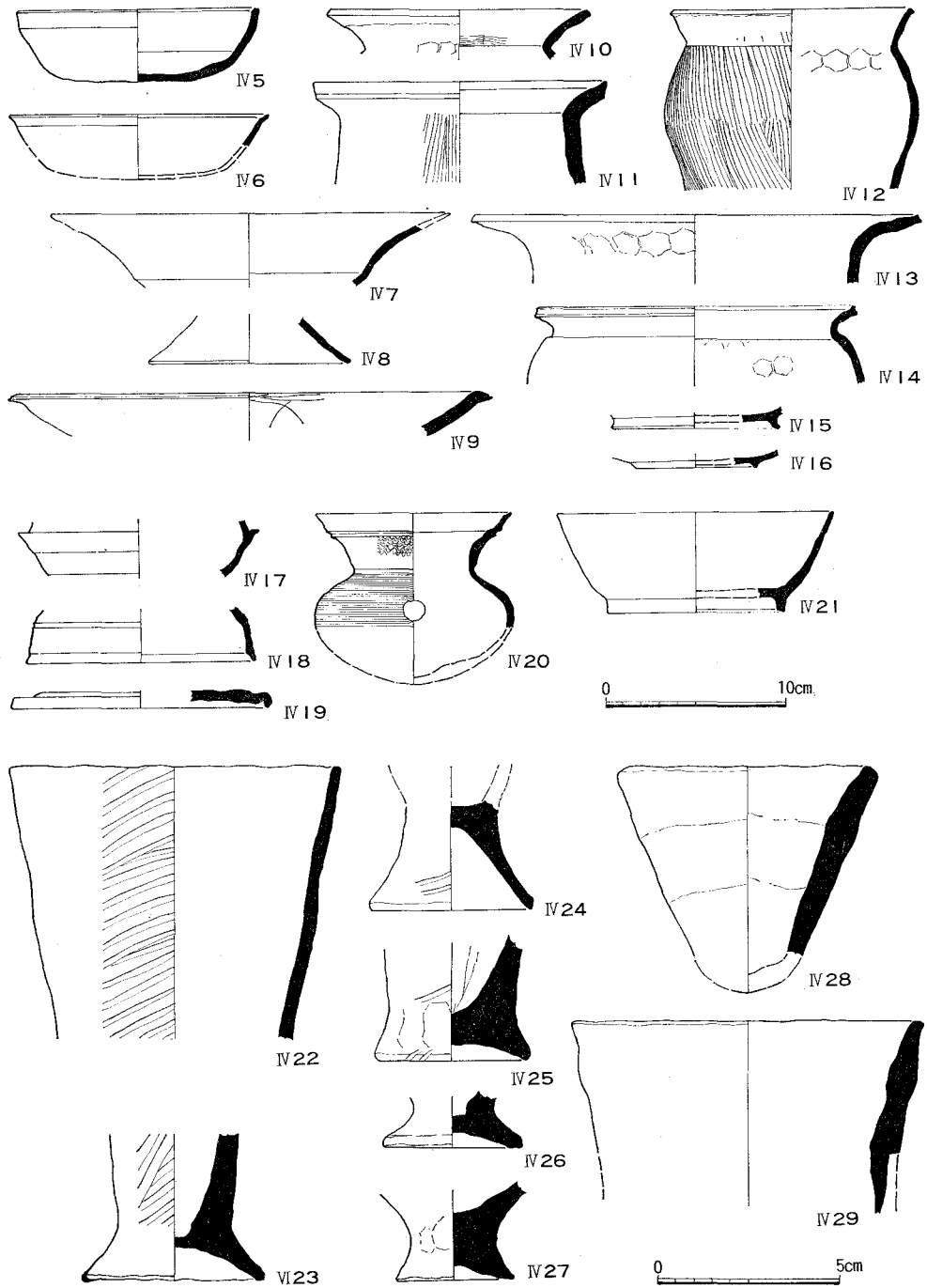
出土した遺物は整理箱に9箱で、平安時代の土器と、弥生後期～平安時代の製塩土器が主である。

縄文土器 出土した土器はすべて晩期の凸帯文土器である(第31図)。IV 1・IV 2は口縁内面を指で押え、外反気味に口縁端部を薄くした土器で、凸帯の断面形は Δ 形で、刻みはV字形である。同様の土器は昭和51年度の調査でも出土している〔京大調査会77図版51〕。凸帯や口縁部の形態からみて、凸帯文土器としては後出のものであろう(第2章④参照)。IV 3・IV 4は、凸帯文土器の底部で、丸底を呈するもの(IV 4)と、丸底に粘土紐を貼り付けて平底状にしたもの(IV 3)とがある。IV 3・IV 4とも外面は粗い篋削りで、IV 3は内面条痕調整である。畿内では断面 Δ 形の凸帯をもつ土器が丸底になる例はごく少ないが、IV 4とIV 1は胎土や焼きや調整方法などに類似点が多く、これらの底部はIV 1・IV 2と同時期のものであろう。IV 2は試掘坑D 7のSX 1上面から出土した。

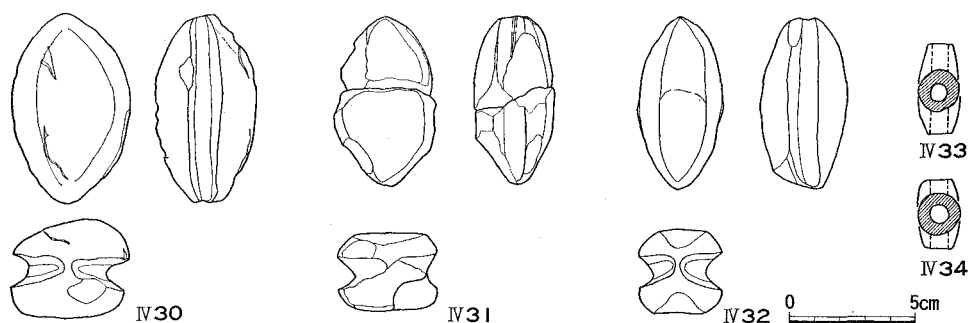
土師器・黒色土器 土師器では、杯、高杯、甕が出土した(第32図)。杯IV 5は、口縁端部内面に狭い面があり、内外両面ともに撫でによる仕上げで、底部には指押え痕が残る。平城宮出土資料における分類の杯Cにあたり、平城宮第IV期に比定できる〔奈文研76〕。試掘坑A 1のSK 1から製塩土器IV 29とともに出土した。IV 6は杯Aで、口縁端部で強く外反し、撫でによる仕上げをもつ土器。9世紀のものであろう。高杯IV 7は強く外反する長い口縁部をもつ土器。緻密な胎土と丁寧な篋磨き仕上げとが特徴である。IV 8は高杯の脚部で、胎土と調整方法がIV 7と類似する。4世紀後葉を中心とした年代に比定できる。IV 9は、口縁端部内面に水平方向の暗文、その下にらせん状の暗文のある破片で、9世紀ご



第31図 縄文土器



第32図 土師器，黒色土器，須恵器，製塩土器



第33図 土 槌

ろと思われる。甕IV10・IV12は、「く」字形の口縁部と粗雑な面取りをした口縁端部とを特徴とする。一方、甕IV14は短い口縁部と鋭い口縁端部とをもつ。また、IV11・IV13のように円筒形の体部をもつ甕もある。やや硬質で粗い刷毛仕上げをもつIV11と、軟質で撫で仕上げをもつIV13とに分れる。IV11・IV13・IV14は、周辺の遺跡では田辺市北沖代遺跡(第34図)、また尼崎市金楽寺貝塚(尼崎市教委76)に類例がある。10世紀ごろと考えられる。

黒色土器は、すべて内面にのみ炭素の吸着があるA類で、椀の底部が主である(第32図)。そのほか、薄手で口縁内面に1本の沈線を持つ破片が少量出土している。小さい三角形の高台をもつIV16と、やや外方へひろく台形の高台をもつIV15との2種類がある。田辺市北沖代遺跡から出土した土器が比較資料となり、10～11世紀ごろの年代に比定できる。

須恵器 杯、杯蓋、隼が出土した。IV17は立ち上りをもつ杯、IV18は口縁端部内面に狭い面がある杯蓋で、両者とも6世紀中葉に比定できる。IV21は高台付の杯、IV19は受部近くに段のある杯蓋で、両者とも奈良後期に比定できる。IV20は小型隼の破片で、短く外反して上へ広がる口頸部に、櫛描波状文を密に施している。5世紀後葉である。

そのほか、A 1から緑釉陶器の細片1点、D 6から削り出し輪高台をもち、施釉のみられない緑釉陶器1点、C 1から見込みに『寿』の銘のあるくらわんか茶椀が1点出土している。

製塩土器 出土した製塩土器は、脚台をもつⅠ類、薄手で丸底のⅡ類、厚手で丸底のⅢ類に大別できる(第32図)。

Ⅰ類は、さらにⅠa・Ⅰb・Ⅰc 類に細分できる。Ⅰa類(IV24)は、脚高3.0cmで他のⅠ類と比べて高い脚台をもち、外面に叩き目がある。目良式B類(近藤64)、脚台Ⅰ式(広瀬78)に対応する。Ⅰb類(IV22・IV23・IV25・IV26)は、脚高1.5cm前後で、外面に叩き目、内面に丁寧な撫で仕上げを施すのが普通である。また内底面に篋状工具による調整痕を残す例(IV25)も多い。なお、底径では、5.0cm前後の土器(IV23)と同4.0cm前後のもの(IV25・IV

26)との2種に、形態では、脚台部と体部の境がくびれる土器(IV23・IV26)と直線的なもの(IV25)の2種にそれぞれ分類できる。本類は目良式土器B類の典型をなす土器であり、脚台Ⅱ式に対応する。Ic類(IV27)は、底径がIb類より小さく、脚高は1.5cm前後で、叩き目の有無が不明である。森浩一・白石太郎によるC類に対応する[森・白石68]。Ⅱ類は、器壁の厚さが0.2cm前後の丸底土器で、指押えによる丁寧な仕上げをもつ。目良式土器A類、丸底Ⅰ式のそれぞれに対応する。試掘坑E1で少量出土しただけである。

Ⅲ類(IV28・IV29)は、器壁の厚さ0.8cm前後で、指押えによる粗い仕上げをもつ。口径7.0cm前後の土器(IV28)と同10.0cm前後の土器(IV29)にわかれ、両者は器高も口径に比例した差異がある。本類は、森・白石によるE類・G類と丸底Ⅲ式のそれぞれに対応すると考えられる。

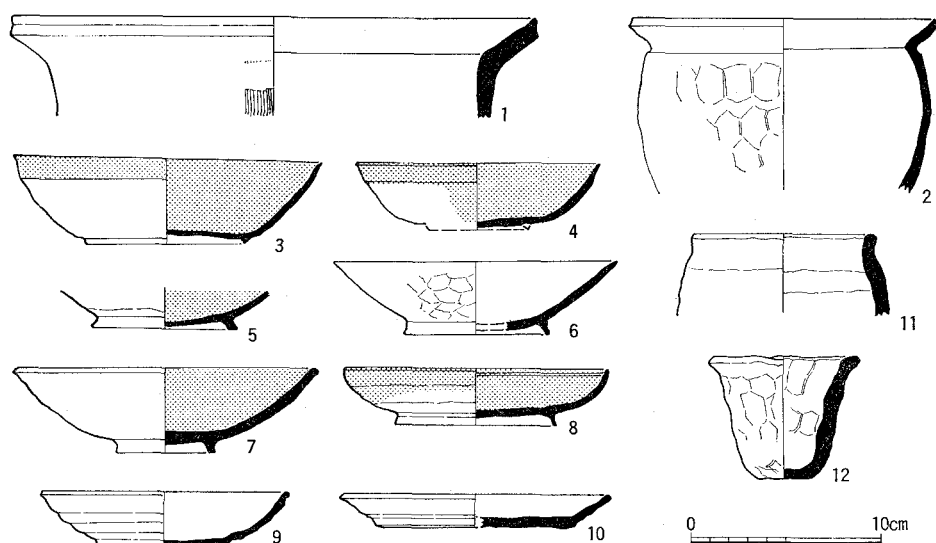
以上のⅠ・Ⅱ・Ⅲ類のうちⅠ類とⅢ類については層位的に分離できた。共伴した土師器・黒色土器からみて、Ⅰ類が4世紀後葉、Ⅲ類が9世紀にそれぞれ年代の一点をおくといえる。Ⅱ類については他の遺跡での検証から5世紀後葉を中心とした時期と考える。

土錘 紡錘形有溝土錘(IV30～IV32)と管状土錘(IV33・IV34)がある(第33図)。IV30～IV32の溝は型押しで作られており、また、IV33・IV34の孔も心棒を使って作っている。IV30は重さ131g、IV32は70g、IV33は8g、IV34は7gである。出土層位からみて、IV30～IV32は10世紀を中心とする年代に比定でき、IV33・IV34は近世まで下る可能性が強い。

4 小結

瀬戸遺跡の今回の調査で出土した歴史時代の遺物は、田辺市北沖代遺跡から出土した遺物(第34図)とほぼ同時期の資料である。第34図1・2は土師器の甕、3・4は小さい三角高台をもつ大小の黒色土器碗、5～8はやや外へひらく台形の高台をもつ碗と皿、6は土師器、そのほかは黒色土器である。7・8は3・4と比べて器壁が厚い。9・10は横撫でによって体部の凹凸が著しい土師器の皿で、口縁はやや外反し、器壁は約0.3cmと厚い。11・12は製塩土器で、11では口縁部が外反して、口縁端部を面取りする特徴がある。瀬戸遺跡には第34図9・10の土師器皿と、11の形態をとる製塩土器はない。畿内の編年から類推すると、器壁の薄い黒色土器は10世紀ごろに、器壁の厚い黒色土器と9・10の土師器皿は11世紀ごろにあたる。したがって瀬戸遺跡の今回の調査地域は11世紀ごろ放棄された可能性が強い。

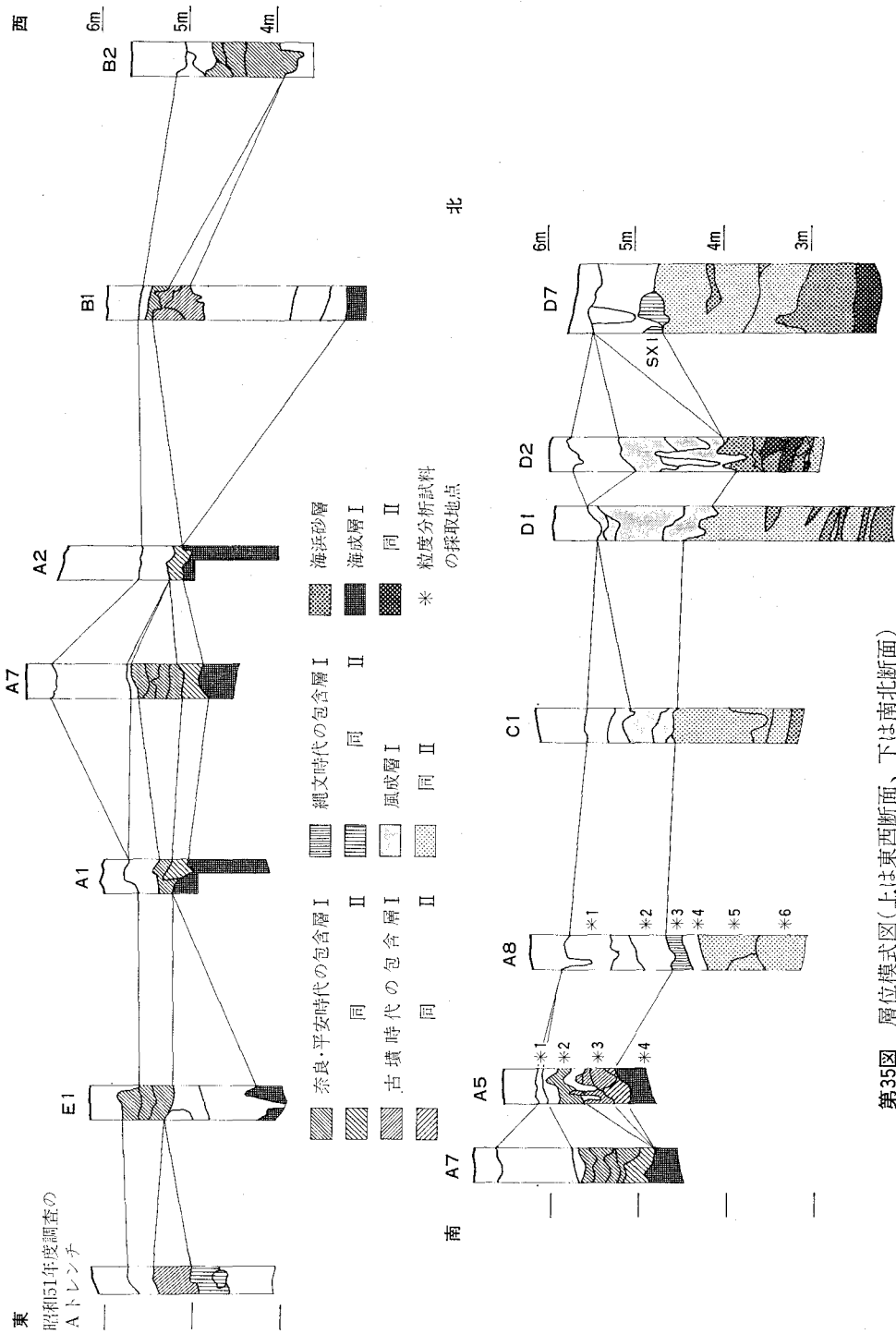
今回の調査のテーマのひとつであった砂堆形成についての調査として、試掘坑A5・A8で粒度分析を行った。第36図は、その分析結果であるが、縦軸は砂粒の大きさを表わし、上へ行くほど細くなり、横軸は砂粒のそろいかたを表わし、右へ行くほど不ぞろいにな



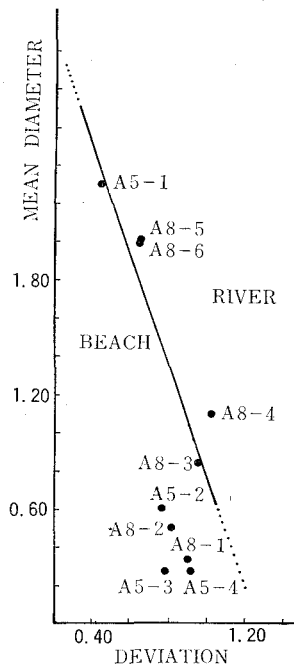
第34図 北沖代遺跡出土の土器

る。図中の斜めに引いた直線より右上のものは川砂であり、左下のものは海砂であることが判っている[Moiola & Weiser 68]。これに従うと、今回採取した砂のうち3点は川砂になるが、川砂としては粒子がそろっており、海浜があまり発達していないために生じた海砂であろう。この図から採取試料は、A5-1, A8-6, A8-5の第1群と、A8-4, A8-3の第2群, A8-2, A8-1, A5-2, A5-3, A5-4の第3群に分けられる。第1群は粒子が細かく、風成砂と考えられ、一方、第3群は貝粉が混入のものが多く、現在の海岸の砂とよく似ていることから、海成砂、もしくは、その再堆積層と考えてよい。第2群は第3群の再堆積層と考えられるだろう。南に位置するA5では、表土のすぐ下が、風成層であるが、A5-1からA5-5の順で下に行くにしたがって砂が粗くなるという特徴がある(第35・36図)。一方、それとは逆に、A5の北西にあるA8では、地表付近に粗い砂があり、A8-1からA8-6の順で下へ行くほど粒子が細くなる。各時代の遺物包含層と海成砂、風成砂の関係をみると、海成砂が高い所に、古墳時代以後の遺跡が立地していることが判る(第35図)。また縄文時代の包含層は、海成砂が高い所になく、逆に風成層Ⅱの直上にみられ、遺跡の立地もしくは遺存状況が異っている。このように砂堆の性質と包含層の相互関係を明らかにすることによって、遺跡の全貌が判りかけたといえよう。

製塩土器について、瀬戸遺跡のⅠ類製塩土器では、Ⅰb類が圧倒的多数をしめ、Ⅰa類とⅠc類はごくまれである。これは、周辺遺跡、たとえば、白浜町江津良遺跡(巽・大原72),



第35図 層位模式図(上は東西断面、下は南北断面)



第36図 粒径中央値と淘汰度の相関図（地点と層位は第35図参照）

田辺市古目良遺跡〔近藤64〕でのあり方と一致する。また、Ⅲ類製塩土器については、周辺遺跡では、白浜町串ヶ峯遺跡、同藤島遺跡〔巽・大原72〕、田辺市北沖代遺跡〔安川78〕に類例があり、遺跡ごとに若干の差異が認められる。和泉・紀伊の製塩土器が、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類の順に変遷したことはほぼ実証されており、さらに、Ⅰ類やⅢ類の型式細分についても、先学において編年の考察がみられる。

製塩土器Ⅰ類とⅢ類の細分は、A区においては層位的に確認できる可能性があり、製塩土器の編年研究を、本格的調査における我々の課題としたい。

なお、層位と縄文土器を家根祥多、土師器・黒色土器・製塩土器を藤原喜信、須恵器・土鍾を花谷浩、粒度分析を竹村恵二の諸氏が担当し、その報告を受けて泉が本文を執筆した。

資料をみせていただいた和歌山県立風土記の丘資料館、田辺市北沖代遺跡の出土資料の発表を許された巽三郎氏と南紀考古同好会に感謝の意を表するしだいである。